白金薮

五月号

平成24年5月発行　第15号

白金葭月例句会案内

六月八日(金) 12：00～15：00アビスタ(第5学習室)
兼題　蛍、玉葱

・六月十二日(火)皇居東御苑吟行句会
(句会場13～17新場橋区民館洋室)

・七月二十日(金) 12：00～15：00アビスタ
(第5学習室)　兼題：巴里祭、ビール

・八月十五日(水)蓮見舟吟行句会手賀沼 9:30 出舟 11時
下船 12：00～15：00アビスタ(第3学習室)

兼題の参考句 (六月八日分：蛍、玉葱)

たまねぎのたましひいろにむかれたり　上田五千石
強し青年干潟に玉葱腐る日も　金子兜太
玉葱の輪の抜けざまの夫婦かな　横須賀洋子
山荘ひらく玉葱も買ひととの〆て　川瀬一貫
玉葱に芽が出る暗さ本願寺　四方万里子
ふりしきる雨となりけり蛍籠　久保田万太郎
ほうたるの草を離れて遊行かな　京極杞陽
ゆるやかに着てひとと逢ふ蛍の夜　桂信子
螢獲(え)て少年の指みどりなり　山口誓子
蛍火の外は蛇の目鼠の目　三橋敏雄

月例句会報('12／5／18)、祭、藜) 10名欠6)

ダックスフント尿かけたる藜かな　飯田孝三
宮出しの神輿見てよりスカイツリー
藜杖おく煎餅は大川屋
だし抜けに木偶の首立つ夏祭
好きな子を額に戴く祭かな

菠薐草アカザ科にして朧なり　増田陽一
藜摘む空地に軍靴らしきもの
手賀沼に漣たてて祭笛
短夜の夜光時計と蛾の目あり
日蝕はまだかと春の逝くばかり

祭笛鯉口あけて浮びけり　増田悦子
祭笛冴えて川面の見えにけり

読みきれぬ本の埃や春愁
ダンボール箱に作りて燕の巣
藜生ふ廃線レール赤錆びて

舟祭スカイツリーの高桟敷
舟渡御の船に群れゐる都鳥
藜の杖 善知鳥（うとう）を叩き落としたり
ふくしまやどん底の地に今年竹
隠棲子藜大きく育てをり

葉に雨を載せて浦島草立てり
舟渡御やヘリコプターの旋回す
宵祭金時豆の煮えてをり
藜あかざ遠野が好きな農夫ゐて
兎みな佳き名付けられ子供の日

杉浦弥栄子

南風太鼓かすかに夏祭り
奥千本坊さんすでに花〈消ゆ
八重桜リヤカーに乗って通り抜け
どれがそう藜を探し真顔かな
青空や藜はどれと都会の子

光成高志

戦の日思ひて藜和へものに
祭笛吹いて男の鍬もつ手
高々と産衣干さるる桐の花
将棋さす父と子にある桜餅
山藤や河原にひらく塩むすび

光　みち

笹も添え水口祭りの苗一把
舟手入れあやめ祭りが近づいて
春の月卵の黄身のもりあがり
菜の花の中なる予科練記念館
夷隅線土竜のような茸売る

吉羽多美子

青木啓泰

燕来る男子寮の軒借りに
ふらここの蹴ったるさきの韓の国
をみならの湯殿詣の素足かな
口上に「ガマの油」や夏旺ん
母の日やなんじゃもんじゃの咲き満ちて

倉田紀子

直立し頂きに咲く棕櫚の花
スカイツリー西の空は霞みけり
母の日は豆腐料理屋大繁盛
アカザとはこんな漢字で読めもせず
獅子舞も夕刻となる我が町は

小山陽也

谷わたる風のもつるる祭かな
水平に遠くを眺め鴉かな
肩幅の広き遺伝子父の日よ

しろみそら

夏めくや大皿運ぶ割烹着
みちのくの大字小字あかざかな

田宮敦子

祭囃テープで流す社務所かな
夏祭りヨーヨー釣りの幼き日
桜の実踏んでゴルフのティーに立つ
洋服屋祭半天売り始め
鴉鳴く空地あかざが茂りをり

釜田敬司

仲見世や技の極みの江戸切子
薫風やボタンで行き来渡し船
降る雨に紫まさる藜の葉
木の洞や手にひんやりと五月来る
子供らの声の少なき祭かな

嘉悦羊三

埋立地はびこる藜白座かな
北辰の星次定まる修司の忌

耀くる田打桜や千枚田
江戸褄の 女性（にょしょう） 遠見の三社祭
天網をこぼるる星の飛ぶことよ　　菅野孝夫

ひなげしの頼りなげなるしたたかさ
しばらくは御輿のあとの人だかり
おたまじゃくしおたまじゃくしの中にゐる
花よりもむしろ藜の雨の音
道一つ祭を避けて帰りけり　　小澤房子

藜杖立てかけておく心太
下校の子藜白藜のせいくらべ
桐の花落ちてゐる陰祭
仏生会鳩に鼻毛のやうなもの
手庇の待乳山より花は葉に

選句結果（数は一般選、＊は孝夫選、（　）は添削後）

5　肩幅の広き遺伝子父の日よ　　そら
（肩幅広き父の日の父よ）
5　道一つ祭を避けて帰りけり　　孝夫
（道ひとつ祭を避けて帰りけり）
4　ひなげしの頼りなげなるしたたかさ　　〃
3＊だし抜けに木偶の首立つ夏祭　　孝三
4＊藜杖立てかけておく心太　　房子
（心太藜の杖を立てかけて）
3＊兎みな佳き名付けられ子供の日　　みち
4　読みきれぬ本の埃や春愁　　悦子
3＊宵祭金時豆の煮えてをり　　みち
2＊みちのくの大字小字あかざかな　　そら
（みちのくのおおあざこあざあかざかな）
3　戦の日思ひて藜和へものに　　多美子
（戦の日思へり藜和へものに）
3　藜生ふ廃線レール赤錆びて　　悦子
1＊祭笛吹いて男の鍬もつ手　　多美子
（祭笛吹いてしなやか鍬もつ手）
2　下校の子藜白藜もせいくらべ　　房子
（下校の子藜白藜のせいくらべ）
2　藜杖おく煎餅は大川屋　　孝三
（藜杖おき煎餅の大川屋）
2　高々と産衣干さるる桐の花　　多美子
（へんぽんと産衣干さるる桐の花）

2　夷隅線土竜のような茸売る　啓泰
1＊舟手入れあやめ祭りが近づいて　〃
1＊仏生会鳩に鼻毛のやうなもの　房子
1＊ダックスフント尿かけたる藜かな　孝三
（ダックスフント尿かけられ藜かな）
1＊菜の花の中なる予科練記念館　啓泰
2　藜の杖善知鳥を叩き落としたり　高志
1　直立し頂きに咲く棕櫚の花　陽也
（直立し頂きに垂れ棕櫚の花）
＊短夜の夜光時計と蛾の目あり　陽一
（短夜の夜光時計と蛾の目）
＊手賀沼に漣たてて祭笛　〃
（手賀沼の漣たてて祭笛）
1　夏祭りヨーヨー釣りの幼き日　敦子
1　祭笛鯉口あけて浮びけり　悦子
（口あけて鯉の浮びて祭笛）
1　しばらくは御輿のあとの人だかり　孝夫
1　奥千本坊さんすでに花消ゆ　弥栄子
（武蔵坊奥千本の花消ゆ）
＊母の日やなんじゃもんじゃの咲き満ちて　紀子
1　ふらこゝの蹴つたるさきの韓の国　〃
＊獅子舞も夕刻となる我が町は　陽也
1　をみならの湯殿詣の素足かな　紀子
1　祭笛冴えて川面の見えにけり　悦子
1　子供らの声の少なき祭かな　敬司
1　将棋さす父と子にある桜餅　多美子
（将棋さす父と子供や桜餅）
1　藜あかざ遠野が好きな農夫ゐて　みち
（藜あかざ遠野が好きな農夫かな）
1　江戸褄の女性遠見の三社祭　羊三
1　口上に「ガマの油」や夏旺ん　紀子
（口上の「ガマの油」や夏旺ん）
1　手庇の待乳山より花は葉に　房子
1　夏めくや大皿運ぶ割烹着　そら
（夏めくや大きな皿を並べたる）
舟渡御の船に群れゐる都鳥　高志
笹も添え水口祭りの苗一把　啓泰
（笹を添え水口祭りの苗一把）
埋立地はびこる藜白座かな　羊三
好きな子を額に戴く祭かな　孝三
葉に雨を載せて浦島草立てり　みち
仲見世や技の極みの江戸切子　敬司
北辰の星次定まる修司の忌　羊三
祭囃テープで流す社務所かな　敦子
燕来る男子寮の軒借りに　紀子
南風太鼓かすかに夏祭り　弥栄子
（風に乗る太鼓の音や夏祭）
薫風やボタンで行き来渡し船　敬司
（薫風やボタンを押して船を呼び）
耀くる田打桜や千枚田　羊三
舟渡御やヘリコプターの旋回す　みち
谷わたる風のもつるる祭かな　そら

(谷わたる風にもつるる祭かな)　陽也
スカイツリー西の空は霞みけり　啓泰
春の月卵の黄身のもりあがり　高志
隠棲子藜大きく育てをり　孝夫
おたまじゃくしおたまじゃくしの中にゐる　敬司
降る雨に紫まさる藜の葉　敦子
桜の実踏んでゴルフのティーに立つ　陽一
藜摘む空地に軍靴らしきもの　〃
菠稜草アカザ科にして朧なり　羊三
天網をこぼるる星の飛ぶことよ　陽也
母の日は豆腐料理屋大繁盛
(母の日の豆腐料理屋大繁盛)
桐の花落ちてゐる陰祭　房子
洋服屋祭半天売り始め　敦子
(はきもの屋祭半天売り始め)
水平に遠くを眺め鴉かな　そら
(水平に遠くを眺め鴉の子)
舟祭スカイツリーの高桟敷　高志
ダンボール箱に作りて燕の巣　悦子
八重桜リヤカーに乗って通り抜け　弥栄子
宮出しの神輿見てよりスカイツリー　孝三
山藤や河原にひらく塩むすび　多美子
花よりもむしろ藜の雨の音　孝夫
木の洞や手にひんやりと五月来る　敬司
(木の洞の手にひんやりと五月来る)
鴉鳴く空地あかざが茂りをり　敦子

どれがそう藜を探し真顔かな　弥栄子
ふくしまやどん底の地に今年竹　高志
青空や藜はどれと都会の子　弥栄子
アカザとはこんな漢字で読めもせず　陽也
日蝕はまだかと春の逝くばかり　陽一

一句鑑賞

道ひとつ祭を避けて帰りけり　飯田孝三　孝夫

眼前、一筋の道がある。地方の街道でも、都市の街道でもよい。道を塞いで祭の最中、あふれる人集りをよけながら帰った、途中、横丁に入ったりはしないのである。もともと「一」は思い入れの数、主意の辞、「この道一筋につながる」。「避けて」は「さけて」。「よけて」の読みもあるが腰がくだける。ア三母音の反復が心意気を伝え、「けり」が殊さら外連味がない。「一つ」も「避けて」も主意性が強く、句がもたれる筈だが、口誦のよろしさと「ひとつ」のかな書きが相乗し、その気は微塵もない。万太郎の「祭」の情緒、蕪村の「月天心」、「葱買うて」の情趣と比べると、掲句「〜けり」は午後より早時刻、場面映えて、足取りが聞こえる。

奥千本坊さんすでに花へ消ゆ　光成高志　弥栄子

奥千本は吉野山最高峰の青根ガ峰(858m)にある奥千

本の桜のこと。吉野山の桜は山の裾から頂上に向かって下千本、中千本、上千本、奥千本と呼ばれている。山裾の下千本と一番上の奥千本とは、標高差が500mある。当然温度差があり、桜の開花は下千本から始まり、時がたつにつれて徐々に中千本～上千本・奥千本と進んでいく。作者は、西行や芭蕉の詩心を慕って、奥千本の西行庵まで登ったのだ。「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすまでもなきすみかかな」の西行の歌の苔清水は今もなおとくとくと清水が湧き出ているとか。芭蕉の「露とくとく試（こころみ）に浮世すずがばや」の句は苔清水を詠った句。作者が見かけた坊さんは、既に、花の中へ消えて見えなくなった。あれは、西行法師か、はたまた、芭蕉さんであったかと、吉野山奥千本の中で、風雅に生きた古人に思いを致す一時であった。現実が時空を飛ぶ膨らみ。

一句鑑賞（14・13号分）

夕雨の庭わたりゆく恋の猫　　飯田孝三紀子（14号）

「有雨」の読みは「ゆうさめ」だろう。その響きは猫のしめやかな足どりに通い、恋の気韻を伝える。その微妙に応じる感覚は繊細だ。ところで、「よべのあめ」は無理だろうか。猫はきれい好き、ぬかるみを嫌う。夕べの雨の水溜りを踏み惑う仕草が見えて、これも面白い。いや、猫の恋泥棒を厭わずか。とまれ、この場合は「～わたりては」だろうか。前月につづく猫の句、作者は猫がお好きのようだ。

わが庭の四五歩で足りる牡丹の芽　　みち（13号）

「四五歩で足りる」が眼目。明るい日差しが目に見え、庭先、四五歩ばかりにはもう牡丹の芽。「四五歩」は庭のスクエアより、早春の花をすぐ身近にする営みのさまを見せ、また、「足りる」は歩数よりも、歩みの弾みと「わが庭の」に相応じる和気を感じさせる。春である。ブラウニングの「時は春、日は朝、朝は七時、：」「The year's at the spring. And days, at the morn; Morning's at the seven;…」を思い出す。

舊乃木邸棗芽吹きて鳩飛べり　　敦子（13号）

旧乃木邸の門を入ると、左手に棗の木がある。水師営所縁の棗の孫木だ。といっても「水師営」を知る人は少ない。この棗はなぜか芽吹きが遅い。数年前の正月五日、邸に隣る乃木神社前を通ると、境内から唱歌「水師営の会見」の曲が流れてきた。「会見」は百余年前のその日だったのだ。「鳩飛べり」は嘱目だろうが、鳩は平和の象徴、もっとも白い鳩だといわれる。

私事にわたるが、先年、娘が高校留学時フォスト・ファザー（アイルランド出身のオーストラリア人）と、偶々、乃木邸前を通りかかり、その希望で邸内を案内したところ、将軍の人物・事跡についてとくと聞かされた。なんとも世は変ったものだ。

かんぴょうが頭の中で煮えている　　啓泰（13号）

昭和一桁生まれは、「男児厨房に入らず」。ゆえに、干瓢の煮えるをご存知ない。待てよ、祖母が物日によく干瓢の海苔巻きを作ってくれたな、ならば干瓢が煮えるのを見た筈だ。でも、それは遠い昔、やがて、“ぐづぐづ”、果ては“べろべろ”。「バカだなお前、「煮えている」と言っているだろ」、「うん、分かる分かる」。新かな「〜いる」がぴたり嵌る。「〜ゐる」では「べろんべろん」。「頭の中で白い夏野となってゐる」（高屋窓秋）より、感覚が肌身につく。

ハガキ句管見（第十五報）　　飯田孝三

突っ立ちて蓮の巻葉のぶっきらぼう　　高志

芥川の名作『蜘蛛の糸』を思い出した。お釈迦さま始め、み仏は、蓮の花のうえから、衆生の苦しみを解き、清らで美しく、厳かで、畏れ多い。尤も、「犍陀多（かんだた）」のようだと見放される。（うちのカミさんは、蓮の池は引きずり込まれそうで怖いという。）『蜘蛛の糸』は、お釈迦さまの訓

ハガキ句十五報（H．18．7月）

水打ったやうな静けさ梅雨月夜　　妙子
嗣治展罷るバルコン百日白　　孝三
葉隠りの純白泰山木の花　　〃
夕薄暑子供のやうに犬諭す　　かほる
雨粒や萍ひとつひとつ揺れ　　〃
背負籠に花の一文字青嶺村　　たか子
花菖蒲紫紺重ねて十二橋　　〃
突っ立ちて蓮の巻葉のぶっきらぼう　　高志
蓮に載る水玉揺れて零れたり　　〃
沢潟やつひの栖は水の郷　　敏子
船頭の安来節顔舟遊び　　〃

藤田嗣治展は今京都で見られる。孝三さんの句は上野で鑑賞された折のものでしょう。つぐはるてんまかるバルコンさるすべりと読むのでしょう。白さるすべりとされたところ、バルコニーでの開放感と嗣治の乳白色の裸婦像の纏わりつく相克が描けています。

えの話だが、掲句は蓮の巻葉の諧謔である。匹夫の煩悩にも、仏の教えにも一切無頓着、呆気羅漢と突き出た風体が面白い。俳諧である。巻葉の一撃が、蓮の花の精神性の土壌を突きやぶる。さり気なくて、味わい深い。結「ふっきらぼう」が手柄。即物具象の比喩がいい。決まり。目に物を見せてくれる。卑見では「ふっ切り棒」が訛った謂い。だとすれば、旧かなでは「～ばう」だが、ふやける。口語の一句としたい。

蓮に載る水玉揺れて零れたり　　高志

お釈迦さまが身を傾けると、蓮の花が揺れ、小玉が零れた。衆生の嘆きに耳を傾けようと、或いは、救いの手を差し延べようとされたのだろうか。水玉の光は、愛語のかがやきか、ご慈悲の玉の粒か。前句は、蓮の巻葉の諧謔、この句は、花、止眼の詠。けれんみのない自在の詠いぶりが魅力である。有様がつぶさに見える。だが、それだけの扁平な写生ではない。連作俳句は、とうに廃れたが、こうして、前句と並べると、内懐の広がりが、一段と見えてくるのが楽しい。

沢潟やつひの栖は水の郷　　敏子

哺乳類の先祖は水中に誕生した。人のいのちも胎水に芽ばえ育まれる。古く、文明が興り、国々が栄えたのも河の流域である。水の見える所はいい。ほっとする。これを母体回帰願望になぞらえたりするが、それはさておき、こころが癒される。掲句、「や」が効き、沢潟の静謐な近景に広々と水を湛える。結「水の郷」がしっかりこれを抱え、不動。「は」の断定がいい。臍である。出ばらずしかと坐る。「水の郷」が「つひの～」に呼応、悠久を孕む。「水の郷」の「の」は只の語呂がらみではない。「個」の情緒を、「悠久」の次元に高める。今、仮に、「～栖を」の「指定」だったら、「個」止まり。「～栖は」でも、「水郷に」なら、同断。「つひの」も「は」も難しい措辞だ。なかなかこうさらりとは使いきれない。正格。しみじみと大きな句である。

船頭の安来節顔舟遊び　　敏子

「安来節顔」が圧巻。句の顔でもあり臍でもある。ひょういと鼻の下で結んだあの、頬被りの表情が目に浮ぶ。船頭さんはご機嫌、鼻唄交じりの櫓捌きである。水郷遊興の一こまだろうか。

拙「嗣治展～」のご高評をありがとうございました。作者の思いが届いたときの喜びは、なんとも大きい。読売教室にも出しましたが、講師も含め、真っ当に読んではくれませんでした。おはがきを拝見、読者あっての作者だとの思いを今更深めました。自分の句にはとても確信がもてないですから。読売教室有志数名で勉強会(五句

出句)をやることになりました。いつまで続くかわかりませんが、先月末、第一回を開きました。最初だからか、みんな意欲的だとの印象です。(平18.7.11)

お便り広場（到着順、敬称略）

日頃格別のご指導に預かり厚く御礼申し上げます。五月十八日の句会のお話をいただいていましたが、菩提寺の施餓鬼会と重なり出席出来ません。申し訳ございません。短文を書いて見ました。よろしければお使いください。以上、お詫び方々ご案内まで。

(H.24.5.5伊藤一艸人)

白金葭四月号ありがたく頂きました。高志の俳句見ました。「歳時記」「耐震偽装問題に思う」等三篇をコピーしました。耐震偽装問題は光成さんの(一)(五)序論と結論にあるとおりですね。すっかり感心しました。歳時記はゆっくり読ませてください。収支報告書を見ました。光成さんの手間が全く無料ではないのですか?収支の部、人名別はあまり感心しませんね。私は在職中から今も多くの人達(安恭さん、光成さんも含めて)のおかげで楽しい人生を生きていると感謝しております。ですから、そのお返しをと思っています。匿名で千円来月から送ります。二十五日楽しみにしています。益々のご活躍を祈ります。(H.24.4.29小山陽也)

＊私の手間はボランティア精神で行っています。匿名寄付という形にさせていただきます。毎度の古代など恐縮に思っています

拝啓　ご無沙汰申し上げております。5/2付けハガキ句報、有り難うございました。私の昔の句が載っていたので、少々驚きました。飯田さんにも申し上げたところですが、三年前に軽い脳梗塞に陥り、現在特に支障なく回復しましたが、併発した慢性腎炎で食事制限を受け通院中で、残念ながら長時間の吟行は無理な状態です。この方の早期回復は思うに任せません。仕事は影響なしに処理しており、何れお誘いに便乗させて頂けるかと、期待しております。取り敢えず、近況をお知らせいたします。貴誌の隆盛をお祈り申し上げます。敬具

(H.24.5.5久保内美清流)

前略ご免下さい。白金葭四月号ありがとうございました。十八日件承知いたしました。我孫子駅十一時、どうぞよろしくお願いいたします。尚、小生野火の副主宰・編集長ですので・・いずれお目にかかるのを楽しみにいたしております。光成様五月五日菅野

(H.24.5.5菅野孝夫)

白金葭訂正版頂きました。私の駄句がのっていなかったそうです。私は全く気がつきませんでした。私のだけでし

たら、経費節約のため訂正しなくとも結構です。此処まで書いたところ、ハガキ句報頂きました。私の家のシュロ今年も見事です。六月十二日は伯母の相続の折の私の労をかって、六月十日から北海道「二泊三日」の招待があります。残念です。良い事はあとになっても楽しみは増えるでしょう。光成さんの単位の話全く同感です。日本は尺貫法はヤメ、今SI単位、アメリカは未だに、ft, lb単位です。CADもJWはダメでアメリカ製のオートキャドにしたり、どうかと思いますね。季語読めない字が多くIME ペットで字を出して読みを調べて百科辞典を、ろくな句がつくれるわけがありませんね。もっと色々の知識が必要ですね。シゲキを受けて楽しみです。どうもありがとうございます。今後ともよろしくお願いもうしあげます。(H. 24. 5. 5小山陽也)

うっとしいお天気でございますが、お変わりなくご健吟のご様子何よりと存し上げます。本日(5／4)ハガキ句報拝受ありがとうございました。ゆっくり鑑賞させて頂いております。「お焦げ」の御句、なつかしくも、あたたかみがあり秀句と存じます。吟行参加いたしたいは山々ですが、姉を一人置いて行くことがむずかしく、外出しにくくなりました。ご健勝を祈りしております。(H.24. 5. 5長屋璃子)

会費同封しました。古代は拡大句会とて二個送りました。数量不足の折は適当に処理して下さい。六月十二日、二十日分で二個送ります。これも適当にしてください。 パソコン・プリンター共新規にしました。全く様子が違い、説明書を見ても分からずにいます。白金葭の句を見ると、時折、あっこれはと私の思い出にある風景を思い出し楽しい一時を持つことが多々あります。本当に感謝しています。私の俳句は唯十七文字の文章であり、光成さんの添削をして頂けるだけで十分満足しています。

(H. 24. 5. 15小山陽也)

光成高志様 はじめまして野火誌の小澤房子です。白金葭は飯田様を通して創刊以前より拝見させて頂いてをりました。よいスタイルの同人誌として光成様の御努力が実られ本当におめでとうございます。この度の野火副主宰菅野編集長御出での句会に飯田様よりお誘いを受け、私も同席致すべく心づもりしてをりましたが、不養生の膿症を拗らせ抗生物質の服用で収まりましたが、もう一週続けることになり、申し訳ありません。欠席の投句をさせて下さいませ。兼題「祭」も当節あまり縁がなく、前に神田明神の祭礼をみたので聞きましたら、今年は大祭はなく来年だそうです。「藜」も昔々、疎開地鹿沼市でみたっきり。でも子供の時から野草大好きで記

憶もたっぷり。思い出させて頂いてありがとうございました。不出来なものをお目にかけます失礼をお許し頂くと共に、事後のことは六月七日勉強会がありますのでお手数でも飯田様にお言伝下されば幸甚に存じます。

敬白(H.24.5.15小澤房子)

光成高志様　過日は、わざわざでんわにて萱大会のお誘いありがとうございました。不自由ながらも出て参ります。昨日は鈴木石夫7回忌で埼玉大会の墓所(市営彩の国)へ行って参りました。前由弘も元気になりました。昨年八王子で十月下旬酒井弘司の朱夏100号記念大会に小生と二人よばれて行ってまもなく十一月に倒れて心臓の手術をしました。そして現代俳句協会の年度賞をもらって何よりと思いました。ところが、彼が幹事長(現俳の)になったら、酒井弘司が評論賞選考委員を辞してしまい残念です。正確にはなる前だそうです。前由弘氏とは小生同学年の同年齢歯車昭和三十年の同時入俳です。十四号にて「牡丹の芽うすむらさきに童女寝る」鑑賞、好意ある評言恐れ入ります。ありがとうございました。芭蕉のかるみ以後(八)大変な作業執筆頭が下がります。御自愛下さい。(H.24.5.14青木啓泰)

受贈誌（5月号）

美しき稚児瞬時に翁山車人形（薊92号）　森下流子
吾見詰む山車人形と目の合はず(〃)　〃
霞ケ浦湖の際まで田を植ゑる(〃特別作品)　駿河岳水
土浦の蔵町灼けて予科練展　(〃　〃)　〃
斯く小さき誕生仏が天地指す　(〃)　野瀬正好
雪掻き終へ珈琲のうまさかな　(野火5月号)池田啓二
人と会ふ喉にきてをり春の風邪(〃)　菅野孝夫
ほたるいか淡き骨あり養花天　(〃)　小澤房子
賤ケ岳より初摘のふきのたう　(〃)　〃
春蘭や一合の飯炊き上がる(白浪5月号)　？
おぼろ月おまえなんかにわかるまい(〃)　？
省略の効き過ぎ二人して昼寝　(〃)　？
春一番ビニール袋が飛んでくる(亞286号)　青木啓泰
村中が屋号で呼び合うつくしんぼ　(〃)　野口輝子
春暁の格納庫出る一番機　(俳句四季五月)　駿河岳水
着陸の翼下に緑の仏都奈良(俳句界五月)　〃
花の山コントラバスの運ばれて(あすか5月号)野木桃花
冴え返る大川望む百度石　(〃)　山尾かづひろ
送電線上下とびかひ鳥の恋(ハガキ句)　長屋璃子

俳窓評論纂

＊　岳水さんから近況を知らせるとて、俳句誌のコピーが送られてきた。中に「私の好きなこの一句」現役俳人による投票による上位340作品という2枚のコピー。一位は左の誓子先生の有名な句であった。

海に出て木枯帰るところなし（70点）

この句の鑑賞を岳水さん他三人の方が200字にまとめられている。昭和十九年作であり、特攻隊の片道飛行を念頭に置いたとあるが、戦後この行は削除された。この思い、次の流子さんの回想録を読めば分かるような気がします。

＊　薊91号より連載にて「吾かく戦へり」森下流子執筆が始まった。先月は、流子さんの駆逐艦「太刀風」に乗り組み舞鶴を出航、サイパン、トラックに帰港し、やがてラバウルに到着したところから、戦いの詳細が書かれている。舞鶴出航の日が私の誕生日であったのは偶然である。ガダルカナル島の争奪戦が語られている。今月は(その二)、ソロモン海戦にて流子さんの活躍が臨場感を持って書かれて居られる。九十二歳の記憶力と思えない矍鑠たる文の走りがある。ここに要約を書くよりも、何れ本となって出版されることゝ思いますので、それまで待ちましょう。俳人で太平洋戦争の体験がある方々は、金子兜太、森澄雄、啓泰さんご存知の加藤木紫蘖さん、それに本誌に寄稿された一艸人さん御本人、戦友会の大岡明男さんなどを挙げられる。戦争体験を語られる方々が段々鬼籍に入られるので、やがて風化していくであろう。我々の世代が受け継いで語り伝えていかねばならない。終戦記念日、或いは敗戦日に蓮見舟を出して、俳句に詠む試みを続けています。俳句において季語になっている行事を詠むのは、大変難しいものですが、少なくとも、年々歳々廻ってくる季節感を大切にしたいものです。

エッセイ

虜囚の詩

伊藤一艸人

私が知遇を得ている戦友会の先輩大岡明男氏は九十二歳、温厚な紳士で矍鑠としてお元気である。

先日、ご自分の所属する書道会の淡紅会展が銀座の画廊であり、私もご案内を頂いたので出向いた。氏の作品は入口近くに飾られていた小品で「大岡瑛川　シベリア悲歌抄」と表題が印刷掲示されていて作品に表題名はなく、いきなり作品の詩が書かれている。

北ノ鎮メト謳ハレシ
関東軍ノ精鋭モ

詔ノママニ矛ヲ捨テ
今シベリアノ土ニ立ツ

囚ハレノ身ハ何時マデカ
洞窟生活何ノソノ
莚ノ上ニマドロメバ
暫シ樂シヤ父母の顔

シベリア悲歌　第十三文所作歌抄

壬辰春日　　老兵大岡明男記

と墨書されていて、額の大きさは40×50cmの小品。受付の女性が大岡さんは自宅の庭木の枝を切り、先を叩いて潰し、それを筆としてこの作品を書かれたと説明して下さった、その小枝の筆も受付の机上に置いてあった。私はこの詩にいたく感銘をうけたので、ことわってカメラに収め、後日、何人かの戦友諸兄に送って、その感動を共有した。戦友と呼べる方達ももう八十五才を過ぎ、解散した戦友会も多いと耳にしている。

大戦の犠牲となり、戦後の復興を一番担ってきた大正生の戦友達、残された人生に幸あれ。私は〈花冷えや銀座画廊に虜囚の詩〉と詠んでみたが、鎮魂の句には遠い。

我孫子日記

4／20例会。4／21SOAコンサート。4／25SOA。4／29成田ゆめ牧場。5／1ハガキ句報63報。5／2SOA。5／5川越。5／6放射線量測定。5／9SOA。5／11月島吟行＊。5／18例会(菅野副主宰御出で)。

＊夏めきて八角神輿蔵の中　　みち

銭湯の煙突四角初夏の風　　敦子

廃船の淦澄み初むる五月来ぬ　　敬司

橡咲くや青き潮寄す隅田川　　一艸人

愛鳥週間（バードウィーク）佃運河を描く人ら　　高志

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴じ製本型で編集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

野火の副主宰の菅野孝夫さんを迎えての句会は十人

の出席、6人の欠席投句の合計80句の選句会となりました。兼題にて作句する勉強会を兼ねていますので、藜と祭の季題で作句したものを主体にしたものです。各人七句選をしてもらい、菅野副主宰には、十四句の選を頂きました。添削の労を厭われず、意見を頂きました。添削句は( )内に書いてあります。会報の五句は原句を載せました。俳句は、切れが大切、出来るだけ補助動詞はトル、遺伝子などの難しい言葉は使わない、さりげない言葉の組み合わせでいいのだ、リズムをとった遊びは徹底して遊ぶ、「宵祭金時豆の煮えてをり」(みち)が特選。「宵祭金時豆が煮えてゐる」でもOK。祭り前夜の家の一齣を書いた当たり前の句。「みちのくのおおあざこあざあかざかな」(そら)が藜の入選句。みちのくのすももともものはな(孝夫)という句を作ったことがあるが、それと同工異曲だなどの評を傾聴しました。

部屋を洋室に移動して、短時間の講話を頂いた。「俳句の素材は殆ど出尽くしているので、新しい風景なども詠むのは不可能に近い。この隘路をどう突破するかは、どういう言葉で表現し直すか、平成24年の風をどう吹かせるかにかかっている。出来合いの言葉から逸れるものをさがす。ささやかな言葉の集まり、日常の言葉の組み合わせを考える。先のそらさんの句は、平成の言葉だ。混ぜ御飯は美味しいけれど、何回も出てくると怒ってしまうぐらいになる。白御飯は、飽きない。字体で言ったら明朝体でいいのだ。季語を自分流に解釈して使ってはならない。山眠る、山笑ふ、にも季語の本意がある。山の薄笑ひ、とか、山の笑ひ初め、などは季語を勝手に作り変えている悪い例。言葉に俳句を合わせることだ。最上級の言葉を使いたい誘惑に駆られるけれど、皮肉なことに、出来合いのもの、通念でもってそういう言葉は干乾びているものだ。大袈裟な言葉を使わない。一人一人の人間は複雑多岐な存在だ。日々のささやかな営みの中で細部なことを詠う、「詩　ことば　人間」大岡信著が参考になると朗読されました。編集子はよくよく考えて見ようと思います。この句会は妙に俳諧ぶったところが無いのは好感が持てたと、最後に褒め言葉がちらとありました。

白金葭　第15号　平成二十四年五月発行　表紙の題字・嘉悦羊三。
写真は白金葭　編集・発行人　光成高志(FAX　04・7187・1068)
発行所〒270・1119 我孫子市南新木2―14―17